

Responsible Care NEWS

2015 春季号



レスポンシブル・ケア®





地球共生時代の レスポンシブル・ケア 思考バウンダリの さらなる拡大を

公益社団法人 化学工学会会長

京都大学工学研究科教授

前 一 廣

地球（ひいては宇宙）のエントロピー増大は何億年オーダーの時間軸で進行しており、この動きをもとに、許容され創造されてきた地球上の自然界のエントロピー増大の時間軸は月、年、日のオーダーである。この自然循環速度に対して、人類社会は産業革命以降の技術の進展により、資源、エネルギーの消費速度（＝地球上でのエントロピー増大速度）を、秒、分のオーダーまで増加させてきた。これと並行して人口増加に伴い、その絶対量が飛躍的に増大している状況にある。

この観点から考えると、自然共生型社会、持続的発展とは、この秒、分のオーダーのエントロピー増大速度を地球上の自然界のエントロピー増大速度に摂動させることにある。このアプローチは、これまで化学が歩んできた、入口原料ベースで新しい物質を創生するというスキームから、出口での消費、廃棄を考えた物質創生へと発想転換する必要がある。すなわち、エントロピー増大速度を抑制するマイルドな消費構造を支えつつ、快適さを提供する化学を指向していくことが、今後のイノベーションの方向性と考えられる。ところが、現在のイノベーションは、未だ石油代替の感が強く、原料、エネルギー供給サイドからの思考から脱していないと思われる。

上述のエントロピー増大速度を抑えるには、廃熱、CO₂、廃棄物を排出するサイトにおいて、できるだけオンタイムで速度を緩和させることがポイントであり、エントロピー増大速度を緩和する技術、製品の開発が望まれるところである。しかし、それだけでは自ずと限界があり、最終的には人間の活動で緩和させるしかないと思われる。このように考えていくと、単にエコ製品を世の中に提供しているだけでは物足りず、社会システムとセットでソリューションを与えることや、人間の環境配慮行動を誘発するなど、製品を考案する思考バウンダリをさらに拡げてイノベーションを推進することが望まれる。

一方、生産拠点における排出速度の緩和には、これまでのレスポンシブル・ケア（RC）、コーポレート・ソーシャル・レスポンシビリティ（CSR）活動に加えて、地域ネットワークの拠点としてのスタンスが必要と考える。自然エネルギーの積極的な導入、地域の廃棄物、排水などの処理／再利用拠点、第一次産業とのエネルギー、物質、経営連携、地域の防災拠点機能、民生への熱供給、自然環境保全による地域全体としての自工場のCO₂排出量軽減など、これまでにまして、地域ベースのCSR（地域SR）を推進することが望まれる。このことは、これまでなかった新しい界面を創出することを意味しており、界面があればそこに必ず物質とエネルギー授受が発生し、同時に等価価値交換による新地域ビジネスが発生する。さらに、この活動で、各地域で住民が快適さを享受できれば、日本国全体で均質に快適な生活へと展開できると思われる。すなわち、地域分散型の中での化学産業の在り方を考える時期が来ているように感じる。

以上、身勝手な思いを綴ったことをご容赦いただき、RC、CSRの思考バウンダリを多面的に拡げていただいて、新しいワールドを創出しつつ、地球共生時代の化学工業へとさらに進化、発展していただきたいと願っている。



松尾委員長

平成27年度 レスポンシブル・ケア委員会

平成27年度レスポンシブル・ケア委員会が、4月28日に開催されました。委員会には95名の委員の出席（含む委任状41名）をいただき、松尾委員長の議長のもとで進められました。

【審議案件】

1. 平成26年度事業報告書案と平成27年度事業計画書案
2. 平成26年度収支計算書案と平成27年度収支予算書案

【報告事項】

3. 第9回レスポンシブル・ケア賞受賞者候補
4. 国際活動報告（改訂RC世界憲章署名状況、ICCAプロセス安全指標の検討状況）

審議案件の内容が事務局より説明され、審議の結果いづれも原案通り承認されました。また報告事項について事務局から状況報告が行われました。

1 平成26年度事業報告書案および平成27年度事業計画書案の概要

（平成26年度事業報告）

- ・新たに4社がRC委員会に加入し、会員数は106社から110社となりました。（4月1日より111社）
- ・第8回RC賞として、大賞1件、優秀賞5件、努力賞5件を選出し、大賞および優秀賞は日化協シンポジウムで受賞講演を行うと共に、会員交流会で発表いただきました。第9回RC賞についても、大賞・審査員特別賞・優秀賞・努力賞の候補を選出しました。
- ・会員交流会を7月に大阪、10月に名古屋、2月に東京で開催しました。
- ・会員へのアンケート結果を集約し、日化協アニュアルレポート資料編を9月に発行しました。RC活動報告会を11月に東京、12月に大阪で開催しました。
- ・地域対話を全国8か所で開催しました。諸事情で中断していた四日市地区と兵庫地区の対話が再開されました。
- ・改訂RC世界憲章への署名はこれまでに55社からいただきました。
- ・ICCAにRCLG加盟協会からプロセス安全指標に基づく報告を行う計画が進められており、タスクフォースで議論を重ねてきましたが、本年4月のRCLG会議で承認され、ICCA運営委員会を経て6月のICCA理事会に提出されることとなりました。

- ・カンボジアのRC活動開始に向けて、平成26年6月にプノンペンでRC普及セミナーを行いました。
- ・RC活動を支援してきたベトナムRC協会のRCLGへの加盟は1年延期となり、本年10月の予定です。
- ・化学品管理委員会・環境安全委員会と協同で進めているサステナビリティ・パッケージのアジア展開事業において、インドネシア、ミャンマー、及びベトナムの3か国でワークショップを開催しました。
- ・化学品管理委員会と協同でGPS/JIPS推進部会を構成し、進捗管理WGとして活動を行っています。
- ・平成26年度の検証は報告書検証10件で、昨年引き続き保安事故防止を共通テーマとして実施しました。

（平成27年度事業計画）

- ・RC活動の継続的改善と社会への認知度の向上、さらに日化協の中期重点テーマの一つであるサステナビリティ・パッケージをアジアで本格的に展開し、各国のRC活動を支援して活動の活性化と視野を広げることを最重要課題とします。

2 平成26年度収支計算書案と平成27年度収支予算書案

- ・平成26年度の収支計算の結果、平成27年度の収支予算の計画を説明しました。

3 第9回レスポンシブル・ケア賞受賞者候補

- ・今年からRC賞はRC大賞、RC審査員特別賞、RC優秀賞、RC努力賞の4つに区分けされました。今回の受賞候補会社は11社で、RC賞各賞は5月27日開催の理事会で正式決定され、5月28日開催の日化協総会で表彰式が行われます。また同日、総会に先立ち開催される日化協シンポジウム2015において受賞講演が行われます。

4 国際活動報告（改訂RC世界憲章署名状況、ICCAプロセス安全指標の検討状況）

- ・改訂RC世界憲章への署名状況について説明しました。
- ・プロセス安全指標の導入について、検討の経緯、合意内容および今後のスケジュールについて説明しました。

from Members

安全・品質・企業倫理が 存続のための基盤であると考えて

株式会社ダイセル

セルロイドを出発点とした4つの事業

——本誌には2度目の登場となりますが、まず事業概要からお願いします。

小河 当社はセルロイドの製造を出発点として、現在はセルロース化学技術をベースとしたセルロース事業、酢酸を中心とした有機合成事業、エンジニアリングプラスチック等からなる合成樹脂事業、自動車エアバッグ用インフレーターを主力とする火工品事業が4本の柱となっています。2013年度の連結売上高は4,100億円強、売上比率は国内・海外ではほぼ半々ですね。

——企業理念・経営方針は？

小河 「社会の求める機能を形に変えて、人々の生活の豊かさ向上に役立ちます」という企業目的を掲げ、「誠実さと地道な努力の積み重ね」「モノづくりへのこだわり」「存在感と達成感の尊重」というダイセルスピリッツに基づいて事業を展開しています。

——レスポンシブル・ケア活動の現状について聞かせてください。

小河 約30年前の堺工場事故を教訓に、レスポンシブル・ケアと企業倫理を最重要課題と位置付けて活動を続けてきました。安全に絶対はありませんが、できる限り絶対に近付けるために、人のミスを防ぐこと、設備の故障を防ぐこと、安全の仕組みの不備をなくすことという3つを重視して取り組んできました。新たな視点としてそれら3つに不備があっても大事に至らない取り組みも必要だと思えます。最近では事業構造の変化により海外の比重が高まりつつあるので、国民性・文化等が異なる人々と共通



グローバル改善大会

認識が持てるように、特に人材育成に力を入れています。

CAPDによる改善活動

——海外拠点との人的交流はどのように…？

小河 エアバッグ用インフレーターを中心とする火工品事業ではグローバル改善大会を開催しており、海外の各拠点での予選会を勝ち抜いたチームが日本のマザー工場に一堂に会します。大会期間を改善週間と称し、拠点間の交流や工場見学会、具体的な改善テーマに関する討議などを実施します。一方、国内のダイセルグループでも「気づき、考え、行動する」という「新3K」をキーワードに毎年、改善事例発表会を開催し、全役員・グループ企業の社長、労働組合の役員、発表者とその上司等、約200名が参加しています。

——発表内容にも特徴があるようですね。

小河 当社ではPDCAではなく、CAPDで改善サイクルを回しています。最初に計画ありきでは事実を見落としてしまう恐れがあるという考えから、発表会でもCとAを強調した内容を重視します。成果を競うのではなく、現場で何に悩み、どのような工夫をしたのかといった過程を共有する場にしようということですね。

——失敗した取り組みも紹介することには抵抗があると思いますが…。

小河 失敗から得られる教訓は多いし、そこから生じた悩みを言い合える職場が安全の文化・風土が根付いた職場であるという考え方です。当社では1990年代半ばに網干工場で生産革新手法を確立し、2000年から全社展開を図ってきました。取り組みの中で言葉の統一、作業・技術の標準化を進め、安全・品質、生産性向上のベースとなるノウハウの共有化を進めてきました。共有化する際には悩みや失敗事例を出し合うケースもありますから、部門長をはじめとする従業員全体の意識が変化してきたと感じています。

——具体的な安全成績の向上には繋がりましたか。

小河 生産革新で取り組んだ現場の作業負荷低減については、2000年時と比較して約5分の1となりました。また、各種の労働安全指標も大幅に向上しています。海外拠点においては主力がエアバッグ用インフレーターなのでトヨタ方式で改善を進めており、安全成績・生産性指標の両面で成果が上がっています。しかし、トラブルが撲滅されたわけではありません。安全に絶対はないので、慢心しないようにしたいですね。

います。

取締役 常務執行役員
生産技術本部長

小河 義美さん



世界で初めての実証試験

——環境活動についてはいかがですか。

小河 エネルギー部門の省エネ、既存生産プロセスにおける省エネ、革新的技術導入による省エネの3つの柱で取り組んでいます。エネルギー部門では大竹工場の循環流動層ボイラー、網干工場のガスタービンによるコジェネレーション設備の稼働が効果を上げています。生産革新を中心とした既存プロセスの省エネでは、ロスを徹底的に排除し熱利用の最適化を図るといった取り組みに加え、「網干—大竹工場のバーチャルファクトリー化」を推進しています。これは両工場をコンピュータシステム上で一つの工場として運営し、エネルギーの全体最適運転を行うという試みです。革新的省エネにおいては、Petlyuk 技術の改良による既存蒸留塔の改造や VRC 技術の有機溶剤系蒸留プラントへの適用を進めています。いずれも大型化学プラントへの導入は世界初で、30%以上の省エネ効果を期待しています。改良型 Petlyuk は商業運転で実績を確認しており、VRC も今後1年をかけて実証試験設備において検証データを取得していきます。

——研究開発部門におけるレスポンスブル・ケアは？

小河 廃棄物削減等の一般的な活動は当然のことで、研究開発の王道は、今お話したような省エネルギー技術など、社会に貢献する製品・プロセスを実現していくことだと考えています。安全面では、総合アセスメント制度を実験用に最適化し、レシピや器具など軽微な変更管理にも対応しています。

——自然災害に加え、サイバー攻撃等の様々なリスクマネジメントが要請されていますが…。

小河 BCP に関する基本方針を定めるなど、震災を教訓として非常時対応体制に万全を期しています。リスク管理委員会においては脅威となる重大リスクを常にブラッシュアップしていますが、更に従来のリスクマネジメントだけではなくクライシスマネジメントも積極的に展開していかなければならないと思っています。

環境・安全投資は必要不可欠

——種々の活動と投資との関係はどのように捉えていますか。

小河 競争力・収益性を向上するための活動と環境・安全に関する投資は、事業継続において必要不可欠な両輪

であると考えています。生産革新によるコストダウンで安全・品質に投資できる体力を維持していくことが重要であり、プロセス革新、商材の革新など、革新の連鎖で両立を図ることができる事業基盤の確保が必要ですね。

——社会とのコミュニケーションについて聞かせてください。

小河 住民の方々と連携したイベントの開催や工場見学会、日化協が主催する子ども化学実験ショーへの参加など、各工場が特徴を生かした地域とのコミュニケーションを図っています。これらの活動はダイセルグループを理解していただくと共に化学産業、ひいてはモノづくりの意義を知っていただくためにも大切だと考えています。現在、従業員とその家族、地域の皆様が一体となって行う工場周辺の森づくりを計画中です。取引先様にご紹介いただいた宮脇昭先生の考え方に、社長が賛同して社内に呼び掛けたもので、播磨工場では、既に植樹の準備を始めています。単なるエコではなく、従業員家族、協力会社、地域全体で取り組める活動にしていきたいと思っています。

——今後の目標は何ですか。

小河 これまでお話してきた様々な活動に地道に取り組み、更にレベルアップしていきたいですね。安全・品質・企業倫理は存続のための基盤ですから、一つでも欠けることのないように、より確固たるものとしていきたいと考えています。

——日化協への要望があれば…。

小河 業界内の情報交換を活発にし、日本の化学産業を盛り上げていく取り組みが一層、拡大することを期待しています。地球規模での活動においても国際的な発言力を更に増すと共に、全ての産業の基盤となる当業界のプレゼンスを高めていただきたいと思います。



子ども化学実験ショー



平成 26 年度

下期会員交流会

2月18日に如水会館で下期会員交流会を開催しました。まず、第8回 RC 賞受賞テーマの中から2テーマ、「リスクアセスメントの有効性向上と安全人材の育成を目指した『安全強化活動』」(旭硝子株式会社)〈RC 優秀賞(審査員特別賞)〉と「ダイレクトな環境コミュニケーション活動の推進」(花王カスタマーマーケティング株式会社)〈RC 優秀賞〉をご発表いただき、その後、5分科会に分かれて意見交換を行いました。

このほかに、RCLG 副議長・APRO 議長である岡野恭介氏(昭和電工株式会社)と日化協事務局より「世界における RC の潮流と日化協の RC 活動」についての紹介を行いました。

(1) 労働安全衛生(人材育成)【参加者6名】

座長：豊島 薫(東京応化工業株式会社)

副座長：大西 一宏(日本化薬株式会社)

話題提供：平岡 茂樹(旭硝子株式会社)

討議概要

話題提供者より、平成26年度 RC 優秀賞審査員特別賞を受賞した内容である「リスクアセスメントの有効性向上と安全人材の育成を目指した『安全強化活動』」により、製造現場等の第一線で教育・指導ができる安全中核要員を養成し、リスクアセスメントの実施・見直しを徹底することで、安全レベルが向上している旨の説明を受けました。また、参加者それぞれが日頃課題と感じている点や困っている点などを出し合いました。それらをもとに、主に①リスクアセスメントの実際、②人材育成をするための教育体系、③社内での講師養成の3つのテーマで討議をしていきました。その結果、リスクアセスメントの有効性を高めるためには、多角的な見方をすることと残留リスクの取扱いを明確にすることが必要であること、また、環境安全的な視点で教育体系への関与が必要となることなどが討議されました。



豊島氏



平岡氏

(2) RC活動・環境保全(コミュニケーション)【参加者7名】

座長兼副座長：木村 昌敏(三菱化学株式会社)

話題提供：山本 裕三(花王カスタマーマーケティング株式会社)

討議概要

RC 活動・環境保全活動における様々なステークホルダーとのコミュニケーションについて、参加各社の活動の共有化や、課題解決のための意見交換を行いました。各社とも業態に応じた種々のコミュニケーションを行っていましたが、共通的には RC レポートなどの報告書をツールとして活用し、社会からの要請へも対応していることがわかりました。コミュニケーションにおける課題としては、活動のマンネリ化や社員間・場所間での活動の温度差への対応、社員の意識改革などが挙げられました。それらに対し、自主的に若手中心の活動を行うことで活性化事例、メディアを利用し社外にも報道されることで社員にやる気が出た事例などが紹介されました。また、社員のマインド向上には社会にどれだけ貢献できているかの教育が必要との意見が出されました。



木村氏



山本氏

(3) 化学品管理

(アジア地区における化学品管理の法規制対応) 【参加者 11 名】

座 長：鈴木 亨 (三菱化学株式会社)

副 座 長：勝又 信宏 (株式会社ダイセル)

話題提供：中村 聡志 (一般社団法人 日本化学工業協会)

討議概要

最初に、話題提供者から「アジア各国の法規制整備・改定情報の提供」と題して、日化協・国際業務部の中期計画について説明していただきました。その後、座長の進行の下、各社が抱えている課題、説明のあった活動内容が各社のニーズにマッチしているのか？また、更に有益なものとするためには？などについて自由討議しました。話題は、アジア地区に留まらず、ロシア、南米にまで広がり、実務者ならではの体験談、意見並びに日化協への期待など、活発な意見交換ができました。限られた時間ではありましたが、参加者の化学品管理の海外法規制対応への強い思いが感じられる分科会でした。



鈴木氏



中村氏

(4) 保安防災 (BCP への取り組み) 【参加者 5 名】

座長兼副座長：豊原 秀史 (日産化学工業株式会社)

話 題 提 供：田川 洋 (東亜合成株式会社)

討議概要

分科会には本社組織からの参加が3社、工場からの参加が2社の5名で、まず各社のBCPに対する現状が報告されました。既にプランを策定済みの会社と東日本大震災等を契機として策定中の会社が半々という構成でした。策定済みの会社からは、専任の担当者を置き、世界共通のシステムとして構築している事例と、一般消費者向けの製品を生産している会社の本社機能のバックアップを考慮した対応について紹介されました。

分科会ではBCP以外にも、緊急時の通信手段の確保、非常時のマニュアルの有効性、最近その重要性が高まっているメディア対策についても意見交換を行いました。まとめとして、業界標準的なBCPが日化協としてできないかとの提言が出されました。



豊原氏



田川氏

(5) RC 監査 (会員各社の取り組み状況) 【参加者 9 名】

座 長：植村 純一 (株式会社クラレ)

副 座 長：本間 康弘 (花王株式会社)

話題提供：草場 義夫 (北興化学工業株式会社)

討議概要

レスポンシブル・ケアの監査に関する話題提供の情報や事前アンケートを基に、監査の実施方法やグローバルな対応について主に監査する立場から意見交換を行いました。

監査の実施方法については、参加者それぞれが自社の実施頻度／体制、対象範囲、ツール(チェックシート等)、監査員の力量／資格などを説明し、それに対し他社の方から質問があり、活発な意見交換の場となりました。有効な監査を行うためには力量の高い監査員が必要であり、そのためには監査員の現場経験や外部教育も重要だが、持ち合わせた感性によるところが大きいとの意見も出されました。

グローバルな対応については、まだ主体的に行っているところが少なく、言葉の問題や安全に関する定義の相違、またISOの仕組みはあるが実績が乏しいなどの課題が挙げられました。



植村氏



草場氏



分科会

事業所の概要

㈱クラレ岡山事業所は、岡山県岡山市の南、岡山三大河川の一つである旭川の河口に位置し、1936年の操業開始よりクラレグループの基幹事業所として、社会に有用な製品を開発・供給することを目的に企業活動を継続してきました。当事業所では、液晶テレビに不可欠な偏光フィルムの原料であるポパール、マヨネーズ容器やガソリタンクなどに用いられているガス遮断性の高いフィルム原料のエパール®、ランドセルに使われている人工皮革クラリーノ®、セメント補強用途などのビニロンやマスクなどに用いられる不織布など世界的にもユニークで環境にやさしい製品素材を生産しています。



▲事業所正門



◀事業所構内

レスポンスブル・ケア活動

岡山事業所では、クラレグループの企業ミッション「私たちは、独創性の高い技術で産業の新領域を開拓し、自然環境と生活環境の向上に寄与します」と安全理念「安全はすべての礎」の下に、環境保全、保安事故の防止、労働災害の撲滅のために日々の活動に取り組んでいます。

【環境保全】

環境保全活動としては、地球温暖化の原因である二酸化炭素の排出削減のために、クリーンなLNG燃料の使用や生産設備の省エネルギー活動を推進しています。また、生産活動で発生した廃棄物の再資源化による有効利用に取り組み、廃棄物ゼロエミッション（最終埋立処分量を事業所で発生する廃棄物量の1%以下とする）を10年以上継続して達成しています。

【保安防災】

当事業所では、近隣の方々へ影響を及ぼしかねない火災・爆発、有害物質の漏洩などの事故災害を未然に防止するとともに、万一の事故災害発生時には被害を最小化するための保安防災体制を確立しています。防災能力の維持・向上を目的

に、事業所内の火災鎮圧訓練、関係官庁・近隣企業と連携した火災や海上への油流出を想定した合同訓練など、毎年様々な訓練を実施しています。

また、事業所員の保安防災能力のレベル向上のため、毎年、岡山市消火技術訓練大会に出場しています。所内大会の結果をもとに選出した全てのチームが日頃の訓練の成果を発揮し、消火栓男子の部で2013年・2014年の2年連続で優勝・準優勝するなど優秀な成績を収めることができました。

【労働安全】

労働災害の撲滅に向けて、KYT（危険予知トレーニング）や作業のリスクアセスメント（危険度評価と対策検討）など各種活動に取り組んでいます。2014年からは、作業前KYとあらゆる危険を感じる場面での指差呼称を確実に実施することを目標とした「チャレンジ100%活動」を推進し、事業所員一人ひとりの安全意識高揚と安全レベル向上に努めています。

地域とのコミュニケーション

事業所近隣地域との交流を大切にしています。事務所内にコミュニケーション施設を設置、地域の方を招いた事業所見学会を催し、事業所運営について理解を深めていただく工夫を重ねています。毎年開催する「クラレ岡山祭り」では、1万人以上の方楽しんでいただいています。また、学術的な貢献として社員が講師役を務めて小学生に化学のおもしろさを知ってもらう化学実験の体験教室「おもしろ化学教室」を20年以上に亘り開催しているほか、事業所の野球場や体育館を使用したスポーツ大会なども行っています。環境面では自然保護活動の取り組みとして岡山県の企業と協働の森づくり事業に参加、山林に苗木を植樹したり、アカマツの枝打ちや間伐作業を行ったりしています。今後も安全と環境に配慮し社会への貢献と交流を深めたいと考えています。



▲おもしろ化学教室



自然保護活動▶

事業所概要

SABIC ジャパン合同会社・真岡事業所は、栃木県南東部に位置する真岡市にあり、1971年に操業を開始しました。SABIC（サウジ基礎産業公社）はサウジアラビア王国に本社を置く世界トップの石油化学企業の一つで、ポリエチレン、ポリプロピレンおよび他の先進的な熱可塑性樹脂、エチレン、メタノール等の基礎化学品ならびに肥料原料のメーカーとして世界の市場をリードする企業の一つです。真岡事業所は日本における生産拠点となるコンパウンディング工場に加え、総合技術研究所を併設し、日本での研究開発、生産拠点としてさまざまな分野のお客様へエンジニアリングプラスチックの供給、ソリューションの提供を行っています。



真岡事業所

レスポンシブル・ケア活動

【環境保全】

真岡事業所は1999年にISO14001の認証を取得しました。SABICが世界規模で推進しているSustainabilityの活動に日本でも注力しており、電力・水の使用量削減、産業廃棄物の削減で大きな成果を挙げています。電気・水に関しては活動を開始した2011年に比べ、原単位は電気で11.4%、水で69.7%削減を達成しました。廃棄物は徹底した分別を進めるとともに、リサイクル化を推進しました。2013年にZERO棟と命名したリサイクルセンターを立ち上げるとともに、生産効率の改善を進め廃棄物発生量の削減を行いました。これらの活動の結果、活動開始前は300トン以上あった単純焼却、埋め立て廃棄物を2014年末にゼロにすることができました。

【労働安全衛生】

法令遵守と安全を最優先の行動規範として事業所方針に明記、すべての活動の基盤としています。事業所としては1993年7月以降無災害を継続、無災害1260万時間を超え継続中です。またSHEMと呼ばれるSABIC独自の安全衛生マネジメントシステムを導入しています。SHEMでは通常の事故、災害の防止のみならず、機密情報の保護や事業所

内のセキュリティー上の緊急事態対応など、防犯についても対象としています。また危険体感を通じた教育も導入し、従業員の安全意識向上に努めています。

【保安防災】

事業所は3交代のチーム編成で24時間稼働しています。各チーム合わせ計年6回の総合避難訓練を実施、また部署毎に想定される漏洩等の非常事態への対応訓練を実施しています。自衛消防隊、非常措置対策本部を編成し、メンバーに対しては普通救命講習を行うなど、非常事態に速やかに対応できる体制を整えています。避難訓練等で見つかった問題については対策を実施、効果を確認し継続して改善を進めています。



ZERO棟



普通救命講習

地域とのコミュニケーション

2001年の鬼怒川清掃活動から始まり、社内有志によるボランティア活動を続けています。2012年には正式にSABIC 真岡事業所ボランティアコミッティを組織し、さらに社会貢献活動に力を入れています。最近では、地元真岡市の福祉イベントの運営補助、近隣公園や河川の清掃活動、社会福祉施設の清掃・補修作業などを実施しています。これらの活動を通して、地域社会への貢献と交流に努めています。



鬼怒川清掃

各地で地域対話を開催

第10回千葉地区地域対話



対話会場



質疑応答



第10回千葉地区地域対話が2015年2月4日（水）市原市の五井会館にて開催されました。

今回は、地域自治会・市民団体43名、行政関係者24名など、計162名の方々に参加いただきました。

対話集会は、今回のテーマである「企業のレスポンス・ケア活動について」に沿って、基調講演、RC紹介、事例発表、パネル討議の順序で進められました。

基調講演は、千葉県環境生活部環境政策課より「千葉県の環境保全行政の取り組みについて」の演題で講演をいただきました。

次に住民の方々に今一度、RCについてご理解いただく目的で「RCとは」と題し、丸善石油化学(株)千葉工場より、RC活動の目的、活動内容及び千葉地区の対話集会開催実績の説明を行い、その後「企業の事例発表」を行いました。一つ目に旭化成ケミカルズ(株)千葉工場から「RC活動紹介」と題し、工場での各種活動について具体例を挙げた説明がありました。発表後のパネル討議で住民パネリストより活動の詳細に関して質問があるなど、興味を持っていただける内容となりました。

二つ目にJSR(株)千葉工場より「CO₂排出量低減活動」について、プロセス改善による大幅な省エネ、CO₂低減事例の発表がありました。2013年度日本化学工業協会RC賞を受賞した事例であり、高い成果と企業努力が伝わる発表となりました。

休憩を挟んだ後は「パネル討議」となります。パネリストは4地区の各代表町会長と行政1名、事例発表会社工場長2名、代表幹事会社工場長1名、計8名です。ファシリテーターは千葉地区会員企業OBで、過去RC活

動の経験のある方を起用しました。OBであり、現在も地区在住であることから地区の状況をよく把握しておりファシリテーターとして柔軟に対応し対話を円滑に進めていただけました。今回、事例発表の中で「保安・防災」に関して多くは触れていませんでしたが、住民パネリストからの質問の中には、大規模災害発生時の住民避難に関する連絡体制や、地震時のプラント緊急停止基準等があり、保安・防災に対する関心の高さが伺えました。

また、保安・防災以外では人材育成や工場での排水処理についての質問がありました。

各質問に対して、企業パネリストは誠意を持って適切かつ、具体的に回答しました。また、それは工場長の言葉、思いであり、力強いメッセージだったと思います。対話は80分にわたる長時間でしたが、多くのテーマで充実した意見交換が行われました。住民の方々からの満足度は高かったのではないかと推察します。

対話集会閉会后、同会場で情報交換会を開催しました。千葉地区は毎回、大変な盛り上がりで中締めするのに忍びない雰囲気となります。盛り上がった分、親密な交流が図れたと思われます。

今回の地域対話は、工場長2名が事例発表を行い、パネル討議でも企業パネリストは全て工場長でありました。これは地域対話では初めてのケースだったとのことでした。

今後は、対話の内容や事前及び当日アンケートの結果から住民の方々の思いを汲み取り、それに応えられる活動を千葉地区全体で推進していきたいと考えています。

第7回愛知地区地域対話



RCプレゼンテーション

第7回愛知地区地域対話が、2015年2月6日（金）豊橋市のホテルアークリッシュ豊橋において開催されました。愛知地区は16社20事業所が加盟していますが、4つの地区に分け2年毎の持ち回りで順次開催しています。今回、愛知東地区では8年ぶりの開催となり、自治会・市民団体36名、行政11名を含む81名の方々が参加されました。

愛知東地区は豊橋市の三菱レイヨン(株)豊橋事業所、花王(株)豊橋工場、岡崎市の東レ(株)岡崎工場と広い地域に点在する3社3事業所で構成されており、それぞれが違った立地条件の中で事業活動を展開しています。開催前に行った地域住民の方々へのアンケートから、最も関心の高かった「保安防災活動」を今回のテーマに絞り込み、各地域（豊橋市、岡崎市）の行政の講演と企業の活動事例発表を行いました。

代表幹事会社である花王(株)豊橋工場の山口工場長から開会の辞、木村邦久豊橋市副市長の来賓挨拶に引き続き、最初の基調講演では「化学産業の自主管理～RC活動とは～」について日化協RC推進部の吉原部長より説明があり、地域住民の方々にRC活動の理解をしていただきました。

次に、豊橋市防災危機管理課より遠州灘・三河湾に面している「豊橋市における地震・津波防災体制」について、岡崎市防災危機管理課より豪雨災害を経験した岡崎市の「大規模災害とその対策」について、それぞれの地域における被害想定と対応、行政の体制について丁寧でわかりやすい講演があり、両市の講演資料は予稿集の中にカラー刷りで綴じ、参加された皆様にお持ち帰りいただきました。

続いて企業の活動事例発表では、三菱レイヨン(株)豊橋



質疑応答

事業所から「三菱レイヨン(株)豊橋事業所の保安防災活動」として保安防災活動の考え方と取り組みについて、東レ(株)岡崎工場から「東レ(株)岡崎工場のレスポンシブル・ケア活動」として環境保全、保安防災、社会とのコミュニケーションの取り組みについて具体的な活動の発表を行いました。

休憩を挟んでの質疑応答では、当日配布の質問票に記入していただいたご質問・ご意見に、豊橋、岡崎両市の防災危機管理課、愛知東地区会員企業3社の代表が答える形で行いました。時間は予定を大幅にオーバーしてしまいましたが、予想以上に多くいただいたご質問・ご意見には概ねお答えすることができました。また、最後に会場からいただいた「有事の際、近隣住民へ支援、援助は」との追加質問にも3社がそれぞれ回答するなど活発で有意義な対話集会を行うことができました。最後に、三菱レイヨン(株)豊橋事業所の福居事業所長による閉会の辞で第7回愛知地区地域対話は終了しました。

その後、会場を移して立食形式で意見交換会を行いました。リラックスした雰囲気の中で、地域の皆様と各社の代表や担当者間の忌憚のない意見交換で盛り上がり、東レ(株)岡崎工場の山崎部長の挨拶で18時50分に閉会しました。

今回の愛知地区地域対話開催に際し、1年程度の準備期間を要しましたが、愛知東地区3社が協力することで大きな信頼関係を築くことができました。また、地域住民及び行政の方々からも「参加して良かった」とのお声をいただき、RC活動を理解していただける絶好の機会であったと実感することができました。

次回は会場を愛知南地区に移して開催する予定です。

第5回四日市地区地域対話



対話会場

第5回四日市地区地域対話は2015年2月10日(火)、四日市大学において自治会、関係行政、業界団体、近隣企業などを含め、総勢221名参加の下に開催されました。

四日市地区地域対話は2003年11月の第4回開催を最後に約11年間中断していました。その間、行政の考えや自治会関係者の意見などを参考にしながら、再開のタイミングを計り、2012年9月に四日市地区RC幹事会社7社(この後開催に賛同する4社が加わった)でキックオフを行い、どのような形にしてもまずは再開することを第一の意義として協議をスタートしました。

幹事会発足にあたっては、一人ひとりの地域対話開催に対する思いや統一した意思を表現するため「地球との共生、環境都市四日市を目指した環境負荷の低減」をビジョンに掲げました。また、四日市港のクルージングや四日市大学での開催とすることで、産学官民が一体となった取り組みを強調するなど、四日市の独自性と手作り感を前面に出した企画を目指しました。

当初は2014年2月3日開催で進めていました。しかしながら、開催予定の1ヶ月前に四日市コンビナートの仲間企業における爆発事故を受け、止む無く1年延期という苦渋の選択を行いました。この時、幹事会メンバーの思いは一時的には消沈したものの「1年後は必ず成功させる」という意思が更に高まり、今回の開催に繋がったものと考えます。

四日市港クルージングには80名の方に参加いただき、高速船「はやぶさ」が出航した朝の10時の天候は薄曇りで気温4℃。もう少し暖かければ、四日市コンビナートの全貌を船の甲板から楽しんでいただけたのですが、少し残念でした。ただ船内では、四日市コンビナートOBの方(語り部)による軽快で丁寧な説明を聴きながら、改めて四日市コンビナートの歴史が確認できたもの



四日市港クルージング

と考えます。

対話は予定通り13時20分から始まり、日化協春山常務理事の開催の挨拶、田中四日市市長の来賓挨拶に続き、基調講演は日化協RC推進部の吉原部長から、RC活動の歴史や取り組み状況について説明し、その後2件の特別講演をしていただきました。

はじめは、淑徳大学人文学部・北野大教授による「やさしい環境講座：化学物質のリスク」。化学物質管理の歴史や化学物質対策の国内外の動きなどについて説明していただきました。休憩を挟んで2件目は、三重県環境生活部地球温暖化対策課の内藤一治課長から「ここまで進んできた地球温暖化(変わりつつある三重の気候を知る)」と題して「三重県地球温暖化対策推進条例」が施行された背景や企業・県民に対するお願いなどについて、分かり易く説明していただきました。

企業発表の内容は、四日市地区幹事会社11社が日化協へ報告している大気や水質、廃棄物などのパフォーマンスデータを集計し、どのように環境負荷低減に取り組んできたのか、各社の活動事例をグラフや写真、動画などを用いて分かり易く説明しました。

最後の質疑応答では、「地域対話と言いながら、企業からの一方的な説明会である」「十数年開催できなかった理由は何か」などと厳しい意見もありましたが、対話後の意見交換会の席で十分にコミュニケーションを図ってご理解いただけたものと考えます。

次回開催に向けては対話や意見交換会、アンケートなどを通じて沢山の課題をいただきました。特に、環境に特化した対話には限界があること、「対話」を意識した企画を取り入れる必要があることなど、地域対話を充実させる企画を検討し更なる関係強化を図っていきたいと思います。

第9回鹿島地区地域対話



事例発表

第9回鹿島地区地域対話は2015年2月13日(金)鹿島セントラルホテルで開催され、地域住民・女性団体・学校関係者48名、行政21名を含む118名が参加しました。対話に先立ち地域住民の方を対象に、(株)ADEKAと(株)カネカのいずれかの工場見学を行った後、対話会場へ移動し、対話集会が行われました。

前回の地域対話は、東日本大震災でかなりの被害を受けたことから、地震・津波に対する保安防災に焦点を絞って実施しましたが、今回は、地域住民の方が最も身近な問題として感じている「環境保全・保安防災の取り組み」をテーマに開催しました。

地域対話は、代表幹事の中川直久・花王(株)鹿島工場長の開会挨拶で始まり、続いて来賓の保立一男・神栖市長にご挨拶をいただきました。その後、日本化学工業協会からのRC活動説明に続き事前アンケート結果報告、基調講演、企業の事例発表の順に対話が進められました。

基調講演の前に、鹿島臨海工業地域環境保全推進協議会40周年記念事業として、茨城県、鹿嶋市、神栖市及び立地企業で制作したDVD「鹿島臨海工業地域と環境保全の40年のあゆみ」を上映しました。鹿島開発の経緯、公害のない工業地帯を目指した全国初の大規模な環境事前評価、行政と企業が連携し、環境に十分配慮しながら鹿島コンビナートが確立された歴史を紹介した内容で、「多くの方の協力と苦勞があり、今があることが良く分かった」など、ご好評をいただきました。

基調講演は、「鹿島地域における環境の現状について」という演題で、江幡一弘・茨城県生活環境部環境対策課課長補佐よりご講演をいただきました。公害防止計画と公害防止協定について説明後、環境監視測定局からのデータを基に、鹿島地域の水質・大気の経年変化につい



質疑応答

て説明がありました。

企業の事例発表は、三洋化成工業(株)が「保安・防災の取り組みについて」、旭硝子(株)が「環境保全の取り組みについて」発表を行いました。三洋化成工業(株)の発表では、東日本大震災を教訓とした地震対策、漏洩防止対策の説明、安全教育の取り組みとして模擬プラントを利用した体験型技能教育などの紹介がありました。旭硝子(株)の発表では、お客様使用時にCO₂削減に寄与するエコガラス(複層ガラス)の紹介、工場内の省エネ施策の推進、産業廃棄物のリサイクルなど具体的な説明がありました。

引き続き、日本化学工業協会の吉原氏の進行で質疑応答が行われました。各講演、発表毎に参加者に記入していただいた質問票にお答えし、その後会場から挙手による質問・意見にお答えする形式で進められました。「海外、特に発展途上国でのRC活動は?」、「環境はコンビナート建設以前の状況と比べてどうなのか」、「北浦の水質改善計画は?」、「鹿島地区には他にも化学企業があるのに、なぜ参加していないのか」、「神栖市にこれだけ優れた企業があるので、子供の理科離れを防ぐためにも、出前授業や実験教室等の開催を増やし、子供たちに化学の素晴らしさを教えて欲しい」など多くの質問・意見をいただき、予定時間を超過する盛況な質疑応答で、レスポンシブル・ケア活動への関心の高さが感じられました。

その後の意見交換会では、出席者を代表して、行政委員連絡協議会会長、女性団体連合会会長、学校長会会長にご感想・ご意見をいただきました。常日頃の企業の努力がうかがえたなど、ご好評をいただきました。今後も、地域住民と企業との相互理解を深めるためのより良いコミュニケーションに努めていきたいと思っております。

第9回岡山地区地域対話



対話会場



質疑応答

第9回岡山地区地域対話が2015年2月19日（木）、倉敷市のヘルスパイア倉敷で開催されました。今回は自治会・町内会35名、関係行政機関30名、地域関係13名を含めて計146名の方々に参加いただきました。特徴としては関係行政機関からの参加者が多いことが挙げられますが、年々、自治会・町内会の方々の参加が増えており、過去最高だった昨年よりも更に多くの方々に参加していただくことができました。

今回のテーマは、「地震津波、化学工場の事故に対する保安・防災」としました。第8回地域対話に引き続き「地震津波」をテーマとして取り上げ、更に「化学工場の事故に対する保安・防災」をテーマに加えました。これらの内容は日頃から住民の方々の関心が高い課題です。日頃のレスポンシブル・ケア（RC）活動の中でこれらの課題に対して企業が何を考えどのように取り組んでいるか、その他業界団体との連携を如何にして実施しているかを自治会・町内会の皆様方に理解していただくことに重点を置いて事前の準備に取り組みました。その中で前回、スケジュールが非常に過密であったという反省点を考慮し、如何にして地域対話を通して相互理解を深めることができるような構成とすることを検討し、今回は試みとして工場見学を取り止め、原点に帰った「RC活動とは？」の講演、また我々の取り組みを理解していただけるような“わかり易い”を意識したパネル討論会を計画し開催しました。

最初に日化協から「レスポンシブル・ケア活動とは？《責任を持って（化学製品を安全に）管理する活動》」について基調講演（講演、DVD）を行いRC活動について理解いただいた後に3社（三菱化学、日本ゼオン、関東電化工業）からのRC活動事例報告を実施しました。それぞれの会社の発表内容が偏らないような事前の打

合せも十分に行いました。続いて岡山県危機管理課・明石氏より、「地震・津波など災害への備え」と題して“命を守るため”の様々な取り組みについてご紹介いただきました。防災組織や法令を説明するのではなく、過去の多くの災害事例を紹介し、如何に自分の命を守るかという住民個人の対策を促す話を中心であり、理解し易く非常に興味深い講演でした。実際、アンケートのコメントにも、「明石氏の講演内容はとても興味深くてわかり易かったため、自分のこととして受け止めることができました」、「危機意識を新たにすることができた」といったものが多く、有意義な基調講演となりました。その後に行われたパネル討論会では自治会・町内会1名、行政1名、会員企業6名、計8名がパネラーとなり、3つのテーマ（RC活動全般、地震津波、化学工場の事故に対する保安・防災）を軸に討論を展開しました。ファシリテーターをお願いした日化協の吉原RC推進部長の進行もあり、3つのテーマを更に深堀りすることができ有意義なパネル討論会となりました。最後の意見交換会では自治会・町内会、関係行政機関、地域関係、業界団体、企業の計99名の方々に参加いただき、約1時間という短い時間ではありましたが、途中で参加者3名から感想や意見を述べていただくと共に全体で活発なコミュニケーションを図ることができました。

今回地域対話を開催するにあたり、企業活動をより理解していただけるような内容にすべく、会員会社の皆さんと一緒に準備してきましたが、アンケート結果をまとめるとまだまだ検討の余地があり、「企業、住民間の情報共有」、「理解し易さ」等の重要性を改めて認識しました。今回の反省を会員会社間でしっかりと共有し、次回第10回地域対話に反映させていただきます。

第6回兵庫地区地域対話



姫路市からの講義

第6回兵庫地区地域対話を2015年3月1日(日)、姫路商工会議所にて開催しました。

兵庫地区では6年ぶり、また兵庫西地区となれば10年ぶり、と久しぶりの開催となりましたが、自治会、関係行政機関、業界団体、会員企業など126名(自治会・学校関係24名)と多くの方々に参加いただきました。

第1部では、工場見学として希望者58名がJRはりま勝原駅からバス2台に乘車し、(株)日本触媒姫路製造所、(株)ダイセル姫路製造所網干工場を見学していただきました。当日の天候はあいにくの雨となりましたが、予定どおり出発して車中からの見学をしていただきました。バス内では各社の従業員による工場概要説明を行い、工場のイメージを分かっていただけではないかと思えます。

その後、会場を姫路商工会議所に移し、第2部からの参加者も合わせて地域対話を行いました。

冒頭に代表幹事事業所である(株)ダイセル姫路製造所網干工場長の挨拶の後、参加者の方々にレスポンス・ケア(RC)への理解を深めていただく目的で、日本化学工業協会RC推進部長の吉原氏より「RC活動とは」と題して、講演を行いました。

その後、各社の事例発表として、今回の幹事事業所である(株)ダイセル姫路製造所網干工場、(株)日本触媒姫路製造所、新日鉄住金化学(株)広畑製造所より、各社の事業所概要、製品紹介などを含め、保安防災、環境保全の取り組み状況を中心にRC活動全般について説明を行いました。

事例発表後は休憩をはさみ、姫路市防災審議監兼危機管理担当理事の岡村氏より、「危機管理(災害時の対応)について」と題して講義を行っていただきました。講義内容は、説明形式ではなく、災害想定資料を参加者に配布し、どのような対応をすべきかについて各人が考える



質疑応答

という形式で行われ、参加者全員が災害対応についての意識向上を図ることができました。

次に、事前に地域の方々を対象に実施したアンケートについて、住友精化(株)姫路製造所より結果報告を行い、その後質疑応答に入りました。

質疑応答は、日化協の吉原氏がファシリテーターとして進行し、当日参加者に配布した質問票と事前アンケート結果の内容について、各社の担当者が回答する形で実施しました。質問内容は、保安防災面では危険物の漏洩対策、異常気象への対応、テロリスト対策など多岐にわたるものであり、また環境保全面についても有害物質の排出削減、廃棄物削減など非常に具体的な内容が多く、各社ともに当日の質疑応答に留まらず、今後も各取り組みを進めていくことが必要であることを認識しました。

第2部の終了にあたっては幹事事業所である新日鉄住金化学(株)広畑製造所長の挨拶の後、会場を移しての意見交換会を開催しました。こちらも101名(自治会・学校関係24名)と多くの方々に出席いただき、また当地区、他地区の会員事業所の方々も含め、非常に和やかな雰囲気の中でコミュニケーションを図ることができました。

今回の地域対話を通じて、地域の方々の防災、環境面などの意識は非常に高く、企業に対する期待もこれまで以上に大きくなっていることを実感しました。また、情報公開、コミュニケーションの活性化といった企業と地域住民が一体感を持つことを望まれており、そのためにも企業からのアプローチが必要であることを認識しました。

今後も各社がRC活動の各取り組みを更に充実させていくことで、地域住民と一体となった安全安心のまちづくりに努めていきます。

R C L G 会 議



会場となったロウズ マイアミビーチ ホテル



会議風景



会議参加者

春の定例レスポンシブル・ケア・リーダーシップグループ(RCLG)会議が、2015年4月16日(木)、17日(金)の2日間、米国フロリダ州マイアミビーチ市のロウズホテルで開催されました。

今回のRCLG会議の重要議題は、①改訂RC世界憲章の署名状況、②アフリカ、中国及びインドにおける活動紹介、③コミュニケーション活動、④プロセス安全指標、⑤ICCM 4の準備、でした。概要は以下の通りです。

①RC世界憲章に関し、各国企業の署名状況が報告され、世界トップ150社の署名対象企業の署名率は現段階で約50%とのことでした(日本の署名率は95%)。なお、日化協から署名企業への署名実施の証明書(Certificate)の発行時期について事務局に質問したところ、旧憲章に関してはそのような証明書を発行していたが、今回は憲章の体裁を見直しており、署名された憲章の文書そのものを証明書として活用してもらいたいとのことでした。

②新興国におけるRC活動に関しては、アフリカにおけるキャパシティ・ビルディング活動及びインドでのRC活動の進捗について事務局の米国化学工業協会(ACC)より報告がありました。昨年RCLGに加盟した中国石油化学工業協会(CPCIF)からは、RC賞の実施やRC各コードに関連するワーキンググループの設立等の紹介があり、実質的な活動を行うための事前準備を進めている段階です。また、中国の外資系企業の協会(AICM)からもCPCIFへの支援状況を含めた報告が行われました。

③RCLGのコミュニケーション活動を担当しているCareline社より、新たに発行するRCステータス報告書に盛り込む項目が提案されました。また、ACCからは、YouTubeなどの動画メディアを使ったRC広報についての紹介がありました。日化協からは、RCライブラリー(RCLG加盟協会で共有するデータベース)を使って、各国協会のRCコードや実施要領等の共有化を促進するように提案し、賛同を得ました。

④プロセス安全指標(PSM)に関しては、前回のRCLGに提案されたICCA共通PSM案に若干の修正を加えた案と、さらに各国協会は米国石油協会(API)基準も代替基準として選択しようという妥協案が、2015年2月のタスクフォースミーティングの結論として提案されました。これに対し、ドイツ企業よりAPI基準を認めるなら現行の欧州化学工業連盟(Cefic)基準も認めるべきとの反対意見が出されましたが、最終的に、反対意見があったことを付記した上で、本案をそのまま運営委員会にRCLG案として提出することで決着しました。

⑤2015年9月末から10月初めに予定されている第4回国際化学物質管理会議(ICCM4)の準備状況の説明が事務局のACCより行われました。ICCM4では改訂RC世界憲章が署名企業リストとともに発表され、サイドイベントとして各国CEOによるパネルディスカッション等が計画されるとのことです。

その他、持続可能な開発とRCとの関係、ISO規格(14001、9001など)の改訂状況、米国のセキュリティーコードの実施状況、各協会からの主要活動指標(KPI)の報告状況等について報告および討議が行われました。

なお、次回のRCLG会議は2015年10月に南アフリカのケープタウンで開催される予定です。

「化学人材育成プログラム」 学生・企業交流会

学生・企業交流会の内容

- ①企業説明 事業内容・博士人材キャリア等を説明
- ②ポスター発表 学生の研究内容について発表及び質疑応答
- ③懇親会 学生と企業の情報交換

「化学人材育成プログラム」は、2010年10月に創設されました。

優秀な人材が化学分野に進学し、実社会向けの教育を受け、その後化学産業に携わるよう、化学産業が求める人材ニーズを大学に発信し、これに応える大学を産業界が支援しています。

本プログラムの趣旨に賛同する化学企業37社で化学人材育成プログラム協議会を設立して、現在、化学産業が求める人材を育成するような優れた取り組みを行っている15大学院・25専攻について、就職支援や研究発表会の開催等の支援を行っています。

本年2月、化学人材育成プログラムの支援対象専攻の学生に対して、化学産業（企業）について正しく理解していただき、今後のキャリア設計をしていただくための情報提供を目的として、「学生・企業交流会」を東京及び大阪で各1回開催しました。

東京会場は、2015年2月17日、大田区産業プラザ小展示ホールにて31社が参加し、大阪会場は、2月24日、薬業年金会館601会議室にて21社が参加しました。両会場合わせて、120名近い学生に参加いただきました。

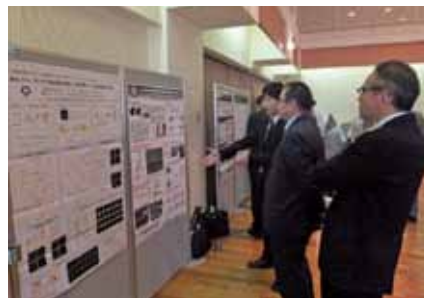
この学生・企業交流会は、参加企業が日本を代表する化学系メーカーのみであり、そして参加学生が日本の主な化学系専攻の博士後期課程に在籍していることが特徴です。学生にとっては興味のある企業から入社後の博士のキャリアなどの情報を効率的に収集することができます。一方、企業にとっては高い専門性を有する多くの学生と直接話ができます。参加学生及び参加企業、双方から好評なイベントとなっています。

化学人材育成プログラム協議会 37社 (株式会社省略)

旭化成	ADEKA
宇部興産	花王
カネカ	クラレ
クレハ	三洋化成工業
昭和電工	信越化学工業
JSR	JNC
JX日鉱日石エネルギー	住友化学
住友ベークライト	積水化学工業
ダイセル	DIC
電気化学工業	東亜合成
東ソー	東レ
トクヤマ	日油
日産化学工業	日東電工
日本化薬	日本触媒
日本ゼオン	日立化成
富士フイルム	三井化学
三菱化学	三菱ガス化学
三菱樹脂	三菱レイヨン
ライオン	



企業説明



ポスター発表



懇親会

●●現在の支援対象専攻●●

北海道大学大学院	総合化学院	総合化学専攻
東北大学大学院	工学研究科	応用化学専攻・化学工学専攻・バイオ工学専攻
	理学研究科	化学専攻
千葉大学大学院	融合科学研究科	情報科学専攻
東京大学大学院	工学系研究科	応用化学専攻
		化学システム工学専攻
		化学生命工学専攻
	理学系研究科	化学専攻
東京工業大学大学院	総合理工学研究科	化学環境学専攻
	理工学研究科	応用化学専攻
		化学工学専攻
		物質科学専攻
東京農工大学大学院	工学府	応用化学専攻
早稲田大学大学院	先進理工学研究科	応用化学専攻
横浜国立大学大学院	工学府	機能発現工学専攻
北陸先端科学技術大学院大学	マテリアルサイエンス研究科	マテリアルサイエンス専攻
京都大学大学院	工学研究科	合成・生物化学専攻
奈良先端科学技術大学院大学	物質創成科学研究科	物質創成科学専攻
大阪大学大学院	基礎工学研究科	物質創成専攻
	工学研究科	応用化学専攻
大阪市立大学大学院	理学研究科	物質分子系専攻
神戸大学大学院	理学研究科	化学専攻
九州大学大学院	工学府	化学システム工学専攻
		材料物性工学専攻
		物質創造工学専攻

日化協定期セミナーと 日化協セミナー総合サイト

日化協では、2013年度より「日化協定期セミナー」を開催しております。これは、会員の皆様の関心の高い分野の情報を中心に、個別トピックスについてまとめた形で情報提供させていただくものです。

講演テーマは、グローバル、異業種、化学品管理、安全、地球環境、技術などの分野となっており、2014年度は計6回開催し、約1,000名の皆様にご参加いただきました。

- 第1回 男女共同参画に向けた産、官の取り組み
- 第2回 欧米における日系化学企業のビジネス環境と課題
- 第3回 営業秘密保護に対する最近の動向
- 第4回 化学物質管理の実際～各社の事例～
- 第5回 「ユーザーの視点」からみた化学産業の課題
- 第6回 成長著しいインドのビジネス環境と課題

2015年度の第1回目は「東アジアの化学品法規制の最新動向～各国の専門家を招聘して～」をテーマに4月13日に経団連会館で開催いたしました。中国、韓国、台湾の3カ国よりレギュレーションのキーマンをお招きし、各国の化学品法規制の最新動向についてご講演いただき、参加者も200名に上り、ご好評いただきました。

第2回以降は、「地球温暖化問題を考える」「イノベーションの創出と社会への貢献」「変容する中国ビジネスの現状と課題」「欧米の化学品法規制の最新動向」など、皆様の関心の高いテーマを中心に、6回程度の開催を予定しております。

詳細な開催内容は、日化協セミナー総合サイト、<http://www.jcia-seminars.org/>に掲載しますのでご覧ください。皆様のご参加をお待ちしております。

2015年度実施内容（予定含む）

第1回：2015年4月13日（月）

経団連会館4階ダイヤモンドルーム
—東アジアの化学品法規制の最新動向
～各国の専門家を招聘して～

『Regulatory Development of Chemical Management in China』

Ms. Ann Ho

Director, Industry Policy Advocacy Committee (IPAC)
Association of International Chemical Manufacturing (AICM)

『韓国化学物質規制の最新情報およびその対応法案』

李 海恩 氏

(株) Nam&Nam インターナショナル
危害性評価チーム アシスタントマネージャー

『Chemical Registration Status and Management in Taiwan』

Dr. Jowitt Li

Director, Safety and Health Technology Center (SAHTECH)

第2回：2015年6月15日（月）

住友不動産六甲ビル2階共同会議室
—地球温暖化問題を考える—（仮）

第3回：2015年8月26日（水）

経団連会館4階ダイヤモンドルーム
—イノベーションの創出と社会への貢献—（仮）



「情報セキュリティ対応部会・連絡会」 合同キックオフミーティング開催（2月24日）



日化協では、化学業界のより一層の情報セキュリティ強化を図ることを目的に、「情報セキュリティ対応部会」（以下、部会）並びに「情報セキュリティ連絡会」（以下、連絡会）を発足させました。部会には企業会員 14 社、また、連絡会には企業会員 22 社（内 14 社は部会企業会員と重複）と 4 つの団体会員にご参加いただき、去る 2 月 24 日、部会及び連絡会合同のキックオフミーティングを開催しました。

キックオフミーティングでは、総勢 33 名の出席の下、冒

頭に西出専務理事よりの挨拶、続いて部会の主査選出について審議し、承認されました。その後、議長を主査へ交代し、続いて 2015 年度の事業計画案について審議し、承認されました。

最後に、オブザーバーとして参加いただいた独立行政法人情報処理推進機構の松坂志氏より標的型攻撃メールの事例についてご報告いただき、質疑応答が行われた後、閉会となりました。

cLCA グローバルガイドライン補完集の発行

日化協では、グローバルな課題である CO₂ 排出削減を推進すべく、ライフサイクル全体を俯瞰し、製品の CO₂ 排出削減貢献量を把握する cLCA(carbon-Life Cycle Analysis) 手法の普及・啓発を行っています。

温室効果ガス（GHG）排出削減貢献量の評価・報告において更なる透明性・信頼性を高めるために、2012 年 2 月には日本版のガイドライン「CO₂ 排出削減貢献量算定のガイドライン」を発行しました。また 2013 年 10 月には、日本版のガイドラインをベースに、ICCA（国際化学工業協会協議会）と WBCSD（持続可能な開発のための世界経済人会議）の化学セクターが協働で、グローバルガイドライン「GHG 排出削減貢献に対する意欲的な取り組み」を発行しました。

グローバルガイドラインは、透明性・信頼性を確保した排出削減量の評価・報告を実現する観点からは大変有用なものですが、解釈が難しい記述等があり、会員企業から具体的な事例への適用例も含めより理解容易な表現を要望されていました。今回刊行した補完集は、具体的な事例を基に、バリューチェーンにおけるレベルの定義、貢献製品の範囲や貢献度合いの定義、使用期間の設定方法や使用するデータの選び方、注意点をわかりやすく解説しています。

補完集は、グローバルガイドラインを使用されている方にはより有用なものとなっていますので、是非ご活用ください。またグローバルガイドラインにご興味をお持ちの方にとっても、その理解促進に非常に役立つと思いますので是非ご活用いただければ幸いです。

※ 補完集は、日化協ウェブサイトの「〈エネルギーと気候変動〉日化協出版物」よりダウンロード可能です。

**GHG排出削減貢献
に対する意欲的な取り組み**

化学産業による比較分析をベースとした
バリューチェーンGHG排出削減貢献量の
算定・報告ガイドライン

補完集

2015年3月
一般社団法人 日本化学工業協会

Responsible Care NEWS

No.77
SPRING

Index

VOICE	2
公益社団法人 化学工業協会会長 京都大学工学研究科教授 前 一廣	
平成27年度 レスポンスブル・ケア委員会	3
from Members [第72回]	4
(株) ダイセル 取締役 常務執行役員 生産技術本部長 小河 義美さん	
平成26年度 下期会員交流会	6
RCの現場を訪ねて	8
(株) クラレ 岡山事業所 SABICジャパン合同会社 真岡事業所	
各地で地域対話を開催	10
千葉地区/愛知地区/四日市地区/鹿島地区/岡山地区/兵庫地区	
RCLG会議	16
「化学人材育成プログラム」学生・企業交流会	17
日化協定期セミナーと日化協セミナー総合サイト	18
TOPICS	19
RC委員会だより	20

RC委員会だより

☆会員動向 (会員数：111社 2015年4月末現在)

入会

▶三菱マテリアル株式会社 (2015年4月1日付)

☆行事予定

6月19日 安全シンポジウム (東京)
6月26日 APRO 会議 (カンボジア)
7月13日 会員交流会 (大阪)

表紙写真の説明

シンガポール・ジュロン島のセラヤ工場

一際力強く放たれたプラントの光は、広大な工業団地の夜空をどこまでも美しく輝かせています。

電気化学工業株提供

編集後記

● RC世界憲章が昨年改訂されました。世界の化学企業トップが、署名によりこの新しい行動規範への賛同を表明しつつあります。日本からも数多くの署名が寄せられています。日化協ウェブサイト「レスポンスブル・ケア」お知らせ」に今回の世界憲章改定についての説明がありますので、ぜひ一度ご覧ください。

● 今年のゴールデンウィークも終わりましたね。有意義に過ごされましたか。また忙しい毎日が戻ってきました。

UD FONT
by MORISAWA

